

彌勒の丈六の仏の像其の頸を蟻に嚼まれて奇異しき表  
を示す縁 第二十八

紀伊国名草郡貴志里に、一の道場有り。号けて貴志寺と曰ふ。其の村人等私の寺を造り、故を以ちて字とす。白壁天皇の代に、一の優婆塞有りて、其の寺に住む。時に寺の内に、音ありて呻ひて言はく「痛きかな。痛きかな」といふ。其の音老いたる大人の呻ふが如し。優婆塞、初の夜は路を行く人の病を得て参り宿るかと思疑ひ、起きて堂の内を巡りて、見索むれども人無し。其の時に塔の木有り。いまだ造らずして淹しく伏して朽つ。斯の塔の霊かと疑ふ。彼の病み呻ふ音、夜ごとに息まず。行者聞き忍ぶること得ず。故に起ちて窺ひ看れば、なほ病人無し。然うして寝たる後夜に、常の音に倍して、大地を響して大に痛み呻ふ。なほ塔の霊ならむと疑ふ。明日に早く起きて、堂の内を見れば、其の彌勒の丈六の仏の像の頸、断れ落ちて土に在り。大蟻千ばかり集りて、其の頸を嚼摧く。行者見て、檀越に告知らす。檀越等懐びて、また造り副ぎ奉り、恭敬ひ供養す。夫れ聞くなり、仏は肉の身にあらず。何にぞ痛み

病むこと有らむ、と。誠に知る、聖の心に示現るるなりといふことを。仏の滅後なりといへども、法身は常に存り、常に住りたまひて易らず。更に疑ふことなかれ。

村童の戯れて木を剋める仏の像を患なる夫斫き破り  
て現に悪しき死の報を得る縁 第二十九

紀伊国海部郡仁嗜の浜中村に、一の愚癡なる夫有り。姓名詳ならず。自性愚癡にして、因果を知らず。海部と安誦とを通ひて往き還る。山に山道有り。号けて玉坂と曰ふ。浜中より正南を指して踰えて、秦里に到る。当の里の小子山に入りて薪を拾ふ。其の山道の側に、戯遊れて木を剋みて仏の像を為り、石を累ねて塔とし、戯に剋みたる仏を以ちて石の寺に居き、時々戯遊る。白壁天皇の世に、彼の愚なる夫戯に剋みたる仏を咲ひて、斧を以ちて殺り破りて棄つ。而うして去りて遠からずして、身挙りて地に隣れ、口と鼻とより血流し、両の目抜け、夢の如くに忽に死ぬ。諒に知る、護法無きにあらず。何ぞ恭敬はざらむ。法花経に説きたまふが如し「もしは童子の戯れて、草木と筆と

四類似の説話展開を見せる下巻十七縁は、本説話の舞台となった土地の近隣の地を舞台として  
六上巻二縁、十二縁、後夜には不思議なことがおきる。  
七「其」は上文の「堂」をさす。上文には彌勒菩薩像を安置してあることはみえない。下巻十七縁は本説話の地に近接した地を舞台とするが、「慈氏禪定堂がみえる。このあたりの土地では彌勒菩薩信仰が盛んであったか。中巻二十三縁、二十六縁、下巻十七縁。  
八この大蟻を世界各地に存する伝説の摩訶目大アリと解する荒俣宏の説はあやまり。和名抄の訓の一部分に「アリ」を含む動物名は、大蟻(オホアリ)、赤蟻(イヒアリ)、飛蟻(ハアリ)の三種。本説話にいう「大蟻」は、この一種。  
九「仏非」血肉身(金光明最勝王経・如来寿量品)。「二」雖「仏滅後、法身常存」(三寶常住、無有變易)(大般涅槃經後分・上)。

第二十九縁 悪業についての現報説話。  
二 底本訓釈(左斗和良波部)。  
三 和歌山県海部郡下津町あたり。  
三「愚癡」の人、不識「因果」(諸経要集・十惡部「邪見縁」)  
四 和歌山県有田市あたり。五 未詳。  
六 有田市宮原町畑あたり。平城宮出土木簡に「紀伊国安誦郡幡地郷」がみえる。  
七 中巻十八縁。八 中巻二十五縁。  
九 妙法蓮華経「方便品の取意」。

第三十縁 あやしき表(仏)の説話。延暦六年原撰本では、本説話が末尾から二番めに位置していたと推定される。

一 下文に八十有余歳とみえる。  
二 未詳。本説話以外に所伝をみない。俗姓としてみえる。三 間名干枝を新撰姓氏録・未定雑姓・右京・河内国にみえる。三 間名干枝とは異なるとする説(攷証)、同一とする説(粟田寛)の両説がある。「干枝」は、攷証所引の本居宣長の説に「干枝へ韓・諸国王及王族之通称也」とみえる。このころ「干枝」と「観規」とはまったくの別音。  
三 和歌山市あたり。四 一定の行業を達成した僧の称であるが、具体的なことは不明。  
五 下巻四縁。六 和歌山市。下巻十六縁。  
七 山口庵寺跡がその地か。このあたりの地域の彌勒菩薩信仰の盛行をうかがわせる例に、下巻十七縁、二十八縁がある。八 七二四一七四九年。九 文殊菩薩と普賢菩薩。あるいは、薬王菩薩と薬上菩薩。一〇 七七七年。

二 造像を完成させるためのもの。経済的、人的な援助。三 桓武天皇。  
三 七八二年。ただし、延暦元年は壬戌。癸亥は延暦二年。八月十九日に改元なので延暦元年の「春二月十一日」は不審、として、延暦二年の誤りか、とする松浦貞俊説がある。下巻三十一縁にも「延暦元年癸亥春二月下旬」とあって本説話と同様の問題を含んでいる。下巻三十二縁の「延暦二年甲子秋八月十九日」をも考慮するならば困難である。四 未詳。本説話以外に所伝をみない。下文に「父」とみえるので、明規は觀規の子。五 中巻十九縁。六 下巻二十四縁。  
七 仏師多利磨とみえる。八 原文「即從坐起」(即從座起)(無量寿経・上)。  
九 仏典語。一〇 自分に与えられた命、の意か。  
三 願望。後代の和文語の「いかで」に同じ。

或るは指の爪甲を以ちて、仏の像を画作らば、みな仏の道を成らむ。また一の手を挙げ、小し頭を低れ、此れを以ちて仏の像を供養せば、上無き道を成らむ」とのたまふ。是を以ちて慎みて信へ。

### 沙門功を積み仏の像を作り命終る時に臨みて異しき表を示す縁 第三十

老僧観規は、俗姓三間名干岐なり。紀伊国名草郡の人なり。自性天年。巧を宗とす。有智の得業にして、並に衆の才を統べたり。俗に著きて營農をして妻子を蓄養ふ。先祖の造れる寺、名草郡能応村に有り。名けて弥勒寺と曰ふ。字を能応寺と曰ふ。観規、聖武天皇の代に、願を發して釈迦の丈六と並に脇士とを彫造る。白壁天皇の世の宝龜十年己未に、造り奉る。と既に畢り、能応寺の金堂に居きて、会を設けて供養す。また願を發して十一面觀音菩薩の木像を彫造る。高十尺ばかりなり。半を造りていまだ畢へず。縁少くして年を歴、老耄いて力弱くして、自づから彫ること得ず。爰に老僧年八十有余歳の時に、長岡宮に宇大八嶋國御めたまひし山部天皇の代の延暦

元年癸亥の春二月の十一日に、能応寺に臥して命終る。二日を遷て更甦還りて、弟子明規を召して言はく「我れ一の語を忘る。念ひ忍ぶること得ず。故に還來るなり」といひて、すなはち床を立て蓆を敷き食を備けしむ。是に檀曰武蔵村主多利丸を請へ、床に居る食を饗して、対面ひて共に食ふ。食ふこと既に畢る。すなはち坐より起ちて、明規と並に諸の親屬とを引率て、長跪きて多利丸を礼みて言はく「観規分少くして命尽く。観音の像を畢へずして忽率に罷る。今幸に嘉き時に逢ふ。盍して思ふ所を申さむ。伏して願はくは、尊の芳き慈を蒙りて聖の像を畢へむと欲ふ。寸心の願、僅に望む所に当はば、故に後生の大なる福は観規に被り、現報の功德は尊主に蒙らむ。至誠に勝へず、また参り還來りて、礼無き状を奉りて、悚慄り謹みて白す」といふ。爰に多利磨と明規と等、悲ひ哭き涕淚して、答へて曰はく「既に語れる状を請く。我れかならず畢へ奉らむ」といふ。沙門聞きて、起ちて拌み歡喜ぶ。また二日を遷て、同じき月の十五日に至りて、明規を召して言はく「今日は仏の般涅槃したまひし日に當る。余れまた命終らむ」といふ。明規告げむとおもひて、父の慈ぶる儀を見、愛の至に勝へずして、詐りて言して白さく「いまだ彼の日に及ばず」とまうす。師曆を乞ひて見て言はく「今十五日に當る。何すれぞ我が

三願う、の意。下位の者が上位の者に対して願う。三第二人称の敬称。中本起経・下はじ三冥界では観規が幸福になり、この世界ではあなたが幸福になる。過去世・現在世・未来世を一個人が經歷する、という視点からの発言ではない。死者の住む空間と生者の住む空間とを對比しての叙述。

云「この観規の発言全体は書簡文の形式をそなえていた、といえよう。書簡の結びのことばとして大伴池主の書簡(万葉集・十八・空三三)に「奉狀不備」、空海の書簡(性靈集・十)に「奉狀不宣」とみえ、この類例は唐宋の書簡にもみえるのだが、本説話の「奉無礼状」も、書状を呈する意である。三七「二月十五日臨涅槃時」(大般涅槃經・壽命品)。

三「慧琳の一切経音義・二十七に妙法蓮華經・序品の「般涅槃」に関して(般博官反、今借音、博末反)とみえ、広韻・上平・二十六・桓(胡官切)に「般樂也、又博干切、釈典又音鉢」とみえる。入声音。「般涅槃」のばあいの「般」を入声音とする通説には疑問点があるが、いまかりにしたがっておく。三「観規に、今日がまさしくその日であること」を告げようと思つたが。

言「具注曆の形式のものであろう。曆を見て今日は何月何日と知ることとは不可能であろう。ただし、具注曆が後代のように日記帳がわりに使用されていたならば可能。天平十八年(高宗の具注曆の一部分が現存するが、その年の二月十一日から十五日までの記事には仏の般涅槃の日である、という記載も無い)。

一「胡跪」胡跪は、謙讓の気持ちをあらわす姿勢。右膝と右足の爪先を地に着け、脛を地に着けず、左膝は立てる。臀部は浮かして踵より離されたであろう。「合掌踞跪」大目乾連冥間救母婆文。

二「釈迦の般涅槃の姿は(面向西方)二(大般涅槃經後分上)とされるが、寝た姿勢であった、本説話のように踞跪ではない。本説話の「向西」は、極楽浄土への往生をめざすこととあらわすか。法苑珠林・兜術篇・弥陀部に呪を述べて於「晨朝時、用楊枝淨口、散華燒香、佛像前胡跪合掌、口誦七遍、若二七三七遍、滅八重五逆等罪、現身不為諸橫所惱、命終生無量壽國」とみえる。一上巻二十二縁。

三「午後二時から五時のころ。日没の前。日没と極楽浄土とのイメージの結びつきは、善導の觀經疏・定善義にみえる。釈迦の般涅槃の時刻は大般涅槃經後分・上によれば「中夜」。

四「内密・菩薩儀」外現・再聞形二(中巻七縁)、一「内秘・菩薩儀」外現・再聞形二(中巻七縁)、五百字受記品。五、上巻二十二縁。本説話も上巻二十二縁も極楽浄土への往生説話と考えられる。ことさらに「戒」が言及される。結婚していたが戒を破つていない、という弁解的記述。

第三十一縁 仏教的なものがまったく含まれていない説話。  
六 神として祭る。七 岐草市。  
八 未婚の女性としては高齡。九 在胎期間の長期にわたることを示している。胎内の子が不思議な力を有することを示している。  
一〇 七八二年。ただし、延暦元年は壬戌。癸亥は延暦二年。一上巻二十縁。  
一一 いゆる鎮懐石伝承(新日本紀・十一所引筑紫風土記、十一所引筑前國風土記)に登場する石は二個。書紀・垂仁天皇二年条にみえる都怒